

科目名 クラス 講義区分	科目ナンバリング	曜日	科目名 クラス 講義区分	科目ナンバリング	曜日
日本語学概論 <春集>	LING1400	月3・木1			

【教員氏名】
有川 康二

【単位数】
4 単位

【授業形態】
『講義』

【講義・演習概要】

ONE PIECEのルフィが涙や鼻水を流しながら「仲間がいるよ！」って叫んでるけど、「る」ってちょっと変。何故？でも、なんとなくわかる。何故？「青空」は[aozora]だけど、[aosora]は変。何故？でも、大学学歌では[aosora]となっている。何故？「きれいな猫の飼い主」と「きれいな猫と飼い主」では意味が違う。何故？「猫が金魚を食べた」はOK。でも、「猫が金魚を食べた」は変。何故？「が」とか「を」って何？格助詞って何？格って何？「が」とか「を」について徹底的に考えます。「が」とか「を」は母なる自然がつくった情報処理の臓器（脳）に発生した情報ウイルス（エラー）です。ホモ・サピエンス語を生み出す言語システムは、このウイルスと共生して構造を生み出す。ヒト脳内の言語システムは母なる自然がつくったウイルス・チェック・システム。意味不明でしょうが、授業を受けると分かります（驚）。「が」とか「を」についてこんなに徹底的に考えるのは、皆さんの人生の中で最初で最後の経験となります。日本語のネイティブ・スピーカーは日本語を文法など意識せずに自由に使えます。日本語はアホほど当たり前前のこと（阿呆）。アホほど当たり前前のことなので、日本語母語話者は、自分は日本語のことは何でも知っていると思込んでいます。しかし、日本語母語話者には意識できない日本語の音や文法の法則やメカニズム、それがヒト脳内で如何に生成されるかは説明できません。自分が全て知っていると思込んでいることが、実は科学的に何も解明されていないという戦慄と一緒に感じませんか？誰でも脳味噌は使えますが、その法則やメカニズムは説明できない。経験科学の手法を用いてヒト脳の言語システムの法則とメカニズムを探ります。科学は、誰もが当たり前すぎて考えるのもアホらしいと思う事柄に驚嘆することから始まります（驚）。子どもはアホなことに驚嘆できるというすばらしい能力の持ち主（科学者）です。長年の学校教育と受験勉強で抹殺されたこのすばらしい能力を、この授業で取り戻してみませんか？「自然言語（ことばをしゃべる）」というアホらしい現象は、物理学の最重要問題である「重力（ものが落ちる）」や「光（明るい・暗い）」というような一見アホらしい現象と同様に、科学の格好の対象となります。鳥は空を飛びまくり、魚は水の中を泳ぎまくり、植物は花を咲かせまくり、犬は臭いを嗅ぎまくり、カエルはジャンプしまくり、私たちヒトはしゃべりまくりまくり。しゃべりまくる生物であるヒトとは、一体、如何なる生き物なのか一緒に考えてみませんか？

【学習（到達）目標】

日本語を三つの視点から概論します。（1）生物言語学の視点＝ヒト自然言語システムは、母なる自然が創造したヒト脳に突然変異と創発的自己組織化が生じて出現した。その一般的性質とはどのようなものか？何故、ホモ・サピエンス語はこのような形になっているのか？（2）日本語教育学の視点＝日本語を外国語として学ぶ人々にとって、日本語の客観的な説明、よりよい説明とはどのようなものか？地球上の数千の言語は、ホモ・サピエンス語の方言です。日本語を外国語、サピエンス語として考えます。（3）哲学的視点＝今この瞬間も時速10万8km（弾丸速度の約19倍）で太陽のまわりを公転している地球の表面に重力でへばりつけられて、自分は今ここで何をしているのか？約138億年前にできた宇宙の中で、46億年前にできた地球の上で、38億年前に生まれた生命のナレノハテとして、自分は何をしながら、老いて、死んでいくのか？こんなことは、お寺とか大学とか超暇な時間が流れている時空間でのみ考えられます。一緒に宇宙市民となって徹底的に考えてみませんか？（驚愕）

【講義・演習計画】

- 第1回：イントロ。「もの」とは何か。「ところ」とは何か。（1）
- 第2回：「もの」とは何か。「ところ」とは何か。（2）
- 第3回：「もの」とは何か。「ところ」とは何か。（3）
- 第4回：「もの」とは何か。「ところ」とは何か。（4）
- 第5回：「もの」とは何か。「ところ」とは何か。（5）
- 第6回：「よい説明」とは何か。（1）
- 第7回：「よい説明」とは何か。（2）
- 第8回：「よい説明」とは何か。（3）
- 第9回：「よい説明」とは何か。（4）
- 第10回：「よい説明」とは何か。（5）
- 第11回：言語の構造（1）
- 第12回：言語の構造（2）
- 第13回：言語の構造（3）
- 第14回：言語の構造（4）
- 第15回：言語の構造（5）
- 第16回：脳とコンピュータ（1）
- 第17回：脳とコンピュータ（2）
- 第18回：脳とコンピュータ（3）
- 第19回：脳とコンピュータ（4）
- 第20回：脳とコンピュータ（5）
- 第21回：ウイルスチェックシステムとしてのヒト自然言語システム（1）
- 第22回：ウイルスチェックシステムとしてのヒト自然言語システム（2）
- 第23回：ウイルスチェックシステムとしてのヒト自然言語システム（3）
- 第24回：ウイルスチェックシステムとしてのヒト自然言語システム（4）
- 第25回：ウイルスチェックシステムとしてのヒト自然言語システム（5）
- 第26回：復習とQ & A
- 第27回：復習とQ & A
- 第28回：復習とQ & A
- 第29回：復習とQ & A
- 第30回：復習とQ & Aと試験

【成績評価の方法】

試験評価：100%
毎回の出席は前提です。筆記試験は、自筆ノートは持ち込み可です。丸暗記は不要です。何故そういう風に考えるのかというロジックに集中してください。毎回、配付する質問コメント用紙（出席カードではありません）にいい質問やいいコメントをした人は、ボーナス点として加算されます。

【参考文献】

Jenkins, L. (2000) *Biolinguistics - Exploring Biology of Language*. Cambridge University Press.

酒井邦嘉(2002)『言語の脳科学-脳はどのようにことばを生みだすか』中公新書
寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版

【事前および事後学習の指示（事前学習 60 時間 事後学習 60 時間）】

前にやったことを順次理解していかないと、だんだん、珍糞漢糞（ちんぷんかんぷん）になります。予習、復習をしてください。

【その他備考（担当教員用）】

プリント等は授業で配布します。